

10年後のまちづくりに生かす若者の声

パートナー

栃木市総合政策課 唐木田仁

9班 コミュニティデザイン学科 179140A 野澤亜莉沙 179127H 田岡龍人
建築都市デザイン学科 179204A 奥谷海人 179236Z 一言大地
社会基盤デザイン学科 179329C 西崎理瑚

背景

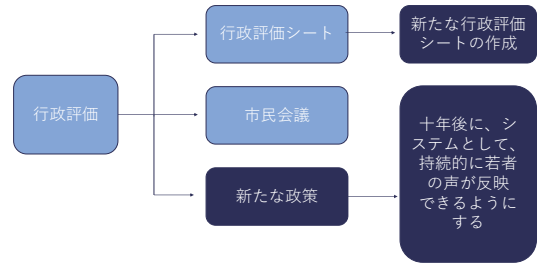
私たち9班は栃木市役所の職員である唐木田さんから、「10年後のまちづくりに生かす若者の声」というテーマのもと、市の行政に若者が声を反映させる方法を考えてほしいという依頼を受けた。現在栃木市には、行政に市民が声を届けるシステムとして「市民会議」と「行政評価シート」の2つがあるが、どちらのシステムも評価層のほとんどが高齢者であるため若者の声が行政に届きにくくなっている。私たちはこの問題を解決するため、新しい仕組みの提案に向けて話し合いを行った。

調査

私たちはまず高校生と大学生を対象に「行政は若者のことを考えているか」「政策に関心があるか」「まちづくりに関心があるか」についてアンケートを行い、若者の市政に対する意識調査を行った。その結果、回答した若者の半数以上が市に対して若者の意見を吸い上げるための環境が整っていないと考えていることが分かった。これは「若者の声が行政に届けられていない」という依頼と合致する。また、「政策に関心があるか」「まちづくりに参加したいか」という項目に関しては、どちらも半数以上が意欲的な回答であり、行政に関心を持ち、可能ならば行政に携わってみたいと考えている若者が少なからず存在するといえる。よって、私たちは若者の関心をさらに伸ばし、積極的に行政に参加できる持続可能な新たな仕組みをつくることできれば、行政に若者の声が届くようになるのではないかと考えた。

目的

以上の背景から、若者が自らの視点で行政評価を行えるような環境を整備するために、新たな持続可能な仕組みを提案することを本プロジェクトの目的と定めた。また、有用な意見を抽出するためには、行政に対して的確な意見を述べられる若者に参加してもらう必要があると考えられる。よって、行政に関心や知識を持っている若者が自然に増えていくような仕組みを取り入れる工夫が必要であると考えた。



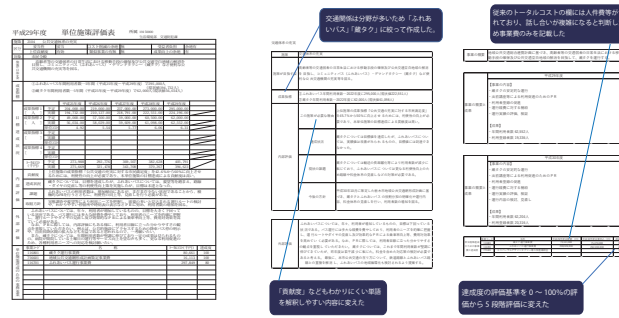
方法

栃木市のまちづくりに関心を持ち、ボランティア活動などを積極的に行っている「とちぎ高校生蔵部」に協力を依頼し、「模擬市民会議」を行う。この会議の進行の様子を見て、だけで円滑な話し合いを行うことができるかどうかを検証する。なお、模擬市民会議は、平成30年度の栃木市市民会議で実際に使用された行政評価シートを用いて行う。ただし、実際の評価シートは専門的な知識がないと読み取りが難しい部分があるため、読み取りやすいように一部修正し、テーマを交通関係の中から「ふれあいバス」「蔵タク」に絞って製作する。また、「ふれあいバス」「蔵タク」のホームページから必要な詳細情報を抜粋し、参考資料として配布する。

※模擬市民会議当日は、10月に猛威をふるった台風19号の被害に関するボランティア活動により、とちぎ高校生蔵部の一部の高校生が会議に参加できなくなってしまったため、足りない人数を宇都宮大学の学生で補うこととなった。しかし、これにより高校生と大学生が意見を出し合う形になり、より理想的な若者の話し合いを行うことができた。

分析結果

立場の異なる若者が会議に参加したこととお互いの発言から新たな気づきを提供し合い、多くの意見を得ることができた。若者の心理に基づいた率直な意見は行政と受け手のギャップを浮き彫りにし、新たな課題点を明確にすることで、10年後も若者が住みたいと思うまちづくり政策に指針を与える力があると確信した。



従来の行政評価シート

模擬市民会議のために作り直した行政評価シート

- ふれあいバス
・大学生
「交通弱者の救済に有用である」
「区間で利用料金が統一されておりわかりやすい」
・高校生
「時刻通りに来ない」
「若者に向けた広報が足りていない」
「バス停の位置が不明」
- 蔵タク
・大学生
「利用者を高齢者に限定すべきか」
「地域での新たなコミュニティ形成に役立てられないか」
・高校生
「若者に好まれないデザイン」
「周囲の目が気になるので利用できない」

なお、本会議終了後に行ったアンケートでは、「楽しかった」「また参加したい」など前向きな意見が多く得られ、今後も若者が積極的に会議に参加する可能性は大いにあると考えられる。

提案

模擬市民会議を通して、市民会議を若者が行うことは、若者のニーズや行政と市民間のギャップに気づく貴重な機会になり得ることがわかった。また、今回は会議の運営を行政関係者でない私たちが行ったことで、より市民の目線に寄り添った会議になった。これをふまえて、行政に若者の声を反映させるため2つの提案をする。

①若者による市民会議の定期開催

市が若者を対象とした市民会議を定期的に開催し、若者目線の声を集めることで、施策に若者の意見を反映させられ、より若者が市のことを考えるまちづくりが実現できるだろう。また、この会議の運営にあたっては、とちぎ高校生蔵部のようなまちづくりに特に関心のある若者を集めた団体を新たに創設し、委託することを提案する。これにより、市職員の負担を軽減でき、同時に市民の目線に立った会議の運営が可能となる。

②従来の市民会議に、若者が参加する

現在行われている栃木市市民会議では参加者の高齢化が課題として挙げられているが、ここに①の参加者である若者を参加させることで、高齢者と若者のニーズの違いを浮き彫りにできる。

以上の提案により、若者が行政に声を届ける環境が整備され、行政に関心を持つ若者の増加も期待できる。

